

## ◆ 今週のコメント

- ・ 腸管出血性大腸菌感染症(O157 VT1VT2)の報告が、1例(男性、30歳代)あります。第8週に報告された3例と、同一グループです。
- ・ インフルエンザの定点当たり報告数は、6.06(406例)で、第4週をピークに5週連続で減少しています。年齢群別では、5～9歳が155例(38.2%)と最も多く、0～14歳の占める割合は、73.9%となっており、第2週以降増加しています。
- ・ 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は、8.30(332例)で、過去5年平均値を上回る報告数で推移しています。京都市衛生環境研究所において、2月に受け付けた病原体定点からの感染性胃腸炎の検体(n=22)から、ノロウイルス5例、ロタウイルス3例を検出しています。
- ・ 水痘の定点当たり報告数は、0.98(39例)で、先週に比べ増えています。年齢階級別にみると、1歳が14例(35.9%)で、他の週に比べ約2～3倍となり最も多く、次いで3歳が7例(17.9%)、2歳が4例(10.3%)となっており、1～3歳で64.1%を占めています。

## ◆ 今週のトピックス: <A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の定点当たり報告数は、1.18(47例)で、3週続けて増加しており、本年度で最も多い報告数となっています。詳細をトピックスに掲載しています。

## ◆ 発生状況

### 全数把握の感染症

- ・ 三類:腸管出血性大腸菌感染症(O157 VT1VT2) 1例【1月以降の累積報告数 4例】
- ・ 五類:アメーバ赤痢(腸管外アメーバ症) 1例【1月以降の累積報告数 4例】

### 定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点67, 小児科定点40, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	6.06	406
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	8.30	332
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.18	47
	③ 水痘	0.98	39
	④ 流行性耳下腺炎	0.23	9
	⑤ 突発性発しん	0.20	8
眼科	流行性角結膜炎	0.40	4

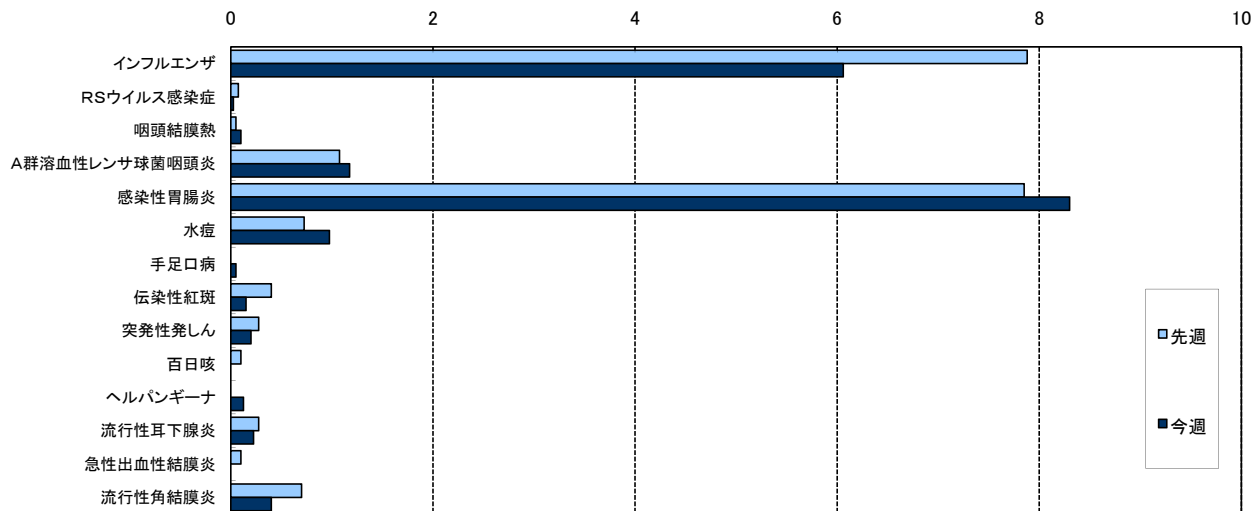
## 【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

(注) 京都市のデータは、平成23年3月10日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

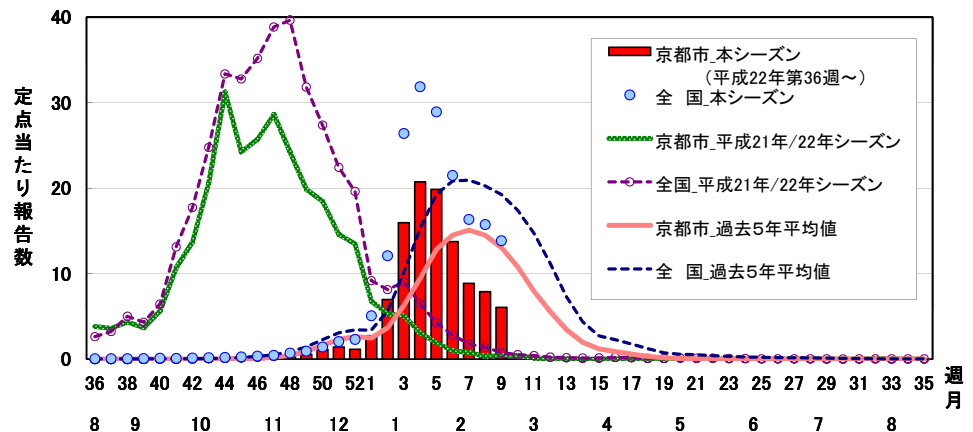
# ◆ 発生状況の概況グラフ

## 1 今週(第9週)と先週(第8週)の定点当たり報告数の比較



## 2 インフルエンザの推移

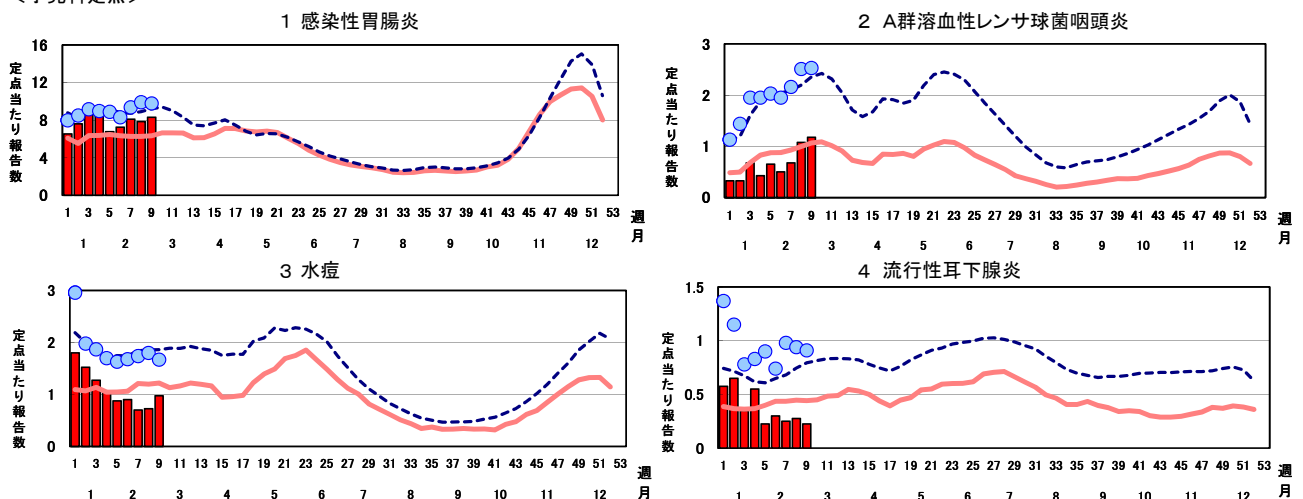
週	報告数(例)
第5週	1,330
第6週	921
第7週	594
第8週	528
第9週	406
累積報告数 (第36週以降)	7,265



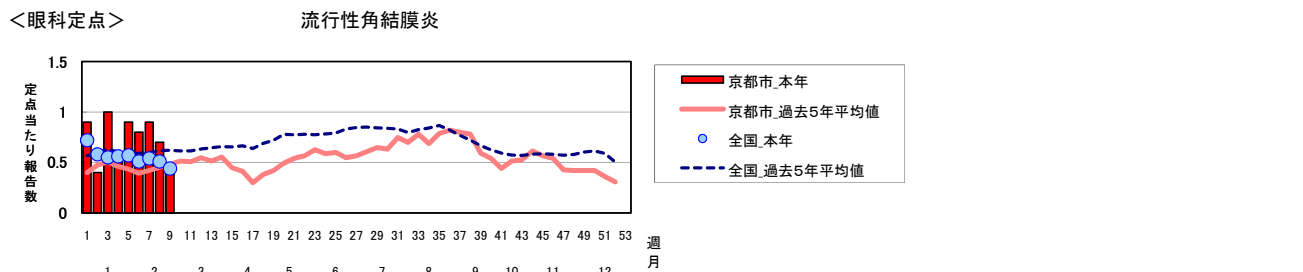
※平成21年/22年シーズンは、新型インフルエンザの発生により、例年と流行傾向が大きく異なるため、別に表記しています。

## 3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



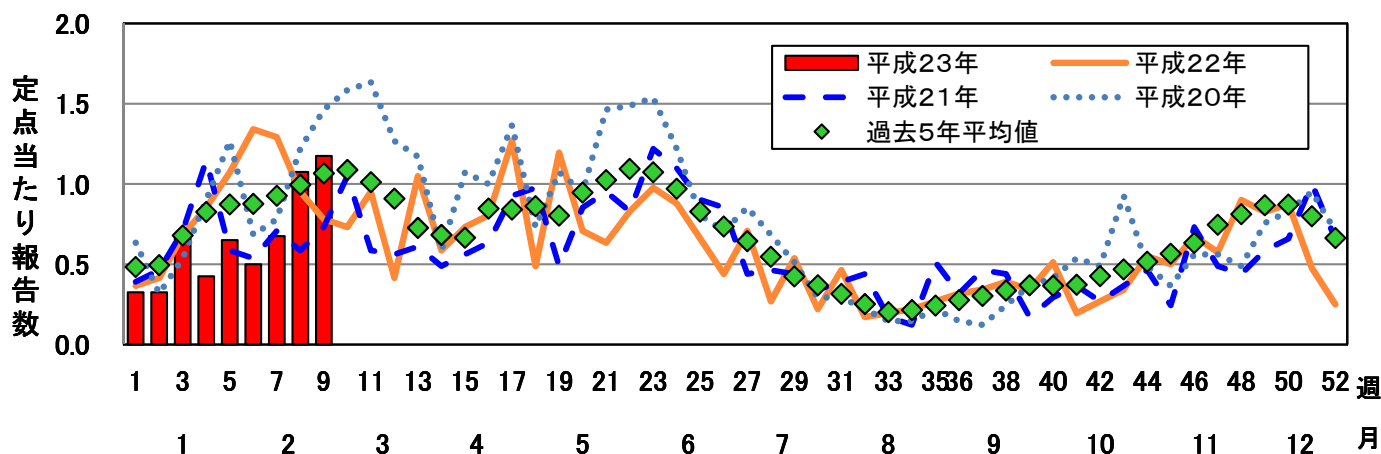
## 第9週(2月28日～3月6日)トピックス: <A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の定点当たり報告数は、1.18(47例)で、3週続けて増加しており、本年で最も多い報告数となっています。平成20～23年(第9週まで)の定点当たり報告数の推移をみると、週単位ではばらつきはあるものの、例年、冬から夏前まで報告数が多くなっています。

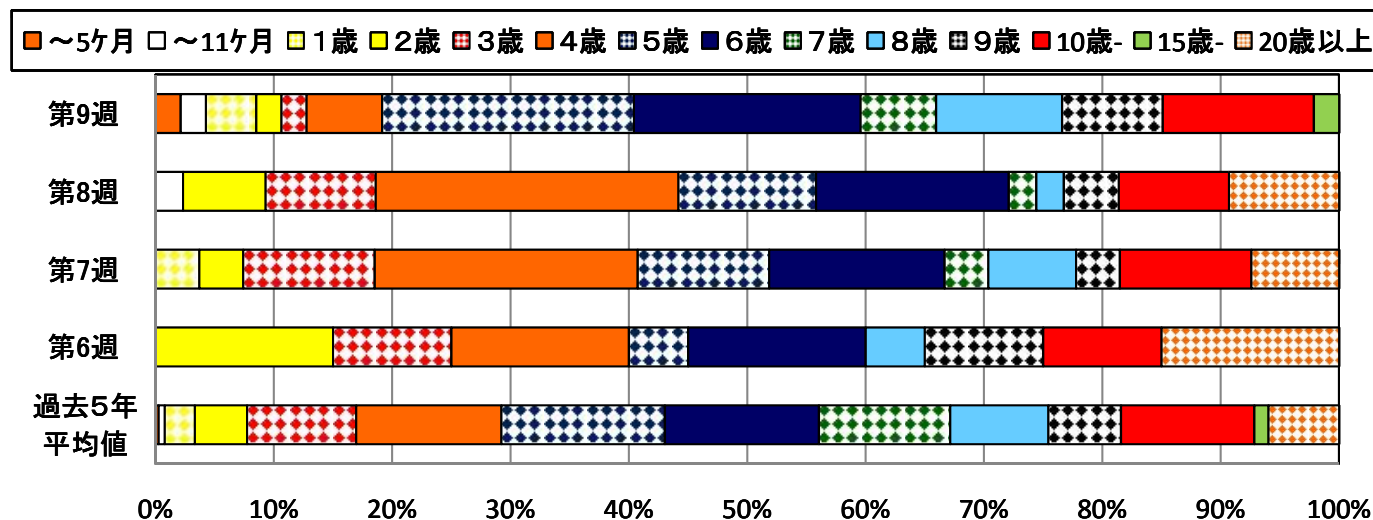
年齢階級別にみると、過去5年平均値では、幅広い年齢階級から報告がありますが、今週は、5歳(10例, 21.3%), 6歳(9例, 19.1%)が大きな割合を占めています。

行政区別では、上京区, 中京区, 西京区で、報告数が多くなっています。

平成20～23年(第9週まで)の定点当たり報告数の推移



年齢階級別割合の推移



行政区別定点当たり報告数の推移

